

2009年

第1回
5/9
(土)

地球温暖化防止と私たちの未来

～低炭素社会をつくるために～

水谷洋一 (静岡大学人文学部准教授)



地球温暖化による破滅的な被害を回避するためには、2050年頃までに二酸化炭素などの排出量を今より80%も削減しなければならぬといわれています。この大幅な排出削減のために私たちが知り、考えなければならないこと、そして将来の低炭素社会のビジョンや当面する政策課題などにつき、まとめてお話しします。

【略歴】静岡大学人文学部経済学科卒業。一橋大学大学院経済学研究科博士課程満期退学。1997年度より現職。専門は環境政策論。

第2回
6/6
(土)

地球環境のマイクロ世界で何が起きているのか

～地球温暖化と関係あるのか～

鈴木 款 (静岡大学創造科学技術大学院・理学部教授)



地球温暖化や人間活動により生態系が大きな影響を受けています。生態系のバランスが崩れ、マクロ生態系である森林や水産資源が喪失し、私たちの生存に影響を与えます。目に見えるマクロ生態系を支えているのが微生物や藍藻と有機物から構成される肉眼では見えないマイクロ生態系です。大気や海洋やサンゴ礁を例に講義します。

【略歴】静岡大学工学部工業化学科卒業。名古屋大学理学研究科(理学博士)、気象研究所を経て、1993年静岡大学。専門は大気・海洋環境学、サンゴ礁学。

第3回
7/4
(土)

環境思想の系譜

～エコロジーはどういう考え方か～

芳賀直哉 (静岡大学大学教育センター教授)



今日、自然に対する人間の振るまいと責任の在り方が問われるようになってきました。この講義では、人間と自然との新しい関係を拓く生命中心主義の代表的な思想を紹介し、シュヴァイツァー、レオポルド、ネスなど欧米の環境思想のほか、21世紀の環境哲学の可能性を秘めた南方熊楠の思想と活動を取りあげます。

【略歴】京都大学大学院文学研究科博士課程宗教学専攻を満期退学。非常勤講師経験後1984年静岡大学へ。理事・副学長を経て現職。

第4回
8/1
(土)

環境「リスク」としての地球温暖化

～環境問題の社会的見方～

平岡義和 (静岡大学人文学部教授)



現在のところ、地球温暖化はコンピューター・シミュレーションによって予測された「事実」、不確実な危険＝「リスク」にすぎず、必ずしもその被害が現れているわけではありません。このような観点から、マスメディアで流布されているのは異なる温暖化の社会的側面を明らかにしようと思います。

【略歴】1953年生まれ。東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程満期退学。奈良大学教授などを経て、現職。専門は環境社会学。

第5回
9/5
(土)

植物の力が私たちを助ける

本橋令子 (静岡大学農学部准教授)



植物はヒトにとって食糧・環境・エネルギーそのものであり、現在の世界的な諸問題である地球温暖化や砂漠化、食糧不足やエネルギー問題などを解決する鍵になります。近年の遺伝子レベルでの研究の進展で植物のもつ巧妙な生体機能が次々に明らかにされていますが、その植物機能を謙虚に学び、応用することで諸問題解決へ挑もうとする研究を紹介しします。

【略歴】1997年東京大学大学院農学生命科学研究科修了。理化学研究所を経て、2004年から現職。専門は植物分子遺伝学、植物生理学。

第6回
10/3
(土)

富士山をとり巻く植物群落を知る

～1000mから3776mへ～

増沢武弘 (静岡大学理学部教授)



古くから富士山に存在する植物群落は標高の低いところから山頂までその姿を少しずつ変えて分布しています。代表的でなじみ深いブナ林、ダケカンバ林、シラビソ林、高山荒原、コケ植物群落を地理的、時間的な面から解説し、受講者と一緒にそれらの将来を考えます。

【略歴】1945年生まれ。東京都立大学大学院理学研究科博士課程単位取得・理学博士。静岡大学理学部生物科学科教授。専門は植物生態学、極限環境科学。極限環境に生育する植物の生き方について研究。

第7回
11/7
(土)

農業は環境を破壊するか

～アフリカ熱帯雨林の焼畑・混作農業～

小松かおり (静岡大学人文学部准教授)



現代の農業は、土地を「改良」し、自然環境を「克服」することを当然としていますが、世界中にはさまざまな農法と考え方があります。この講義では、焼畑・混作という特徴をもつアフリカ熱帯雨林の農業を題材に、その農業を成り立たせる考え方や、どのように生態環境や社会と結びついているのかについて考えます。

【略歴】1966年生まれ。京都大学大学院理学研究科博士後期課程単位取得退学。専門は生態人類学、人と自然の関係論。

第8回
12/5
(土)

社会と自然の関わりを知る

～私たちの未来へ向けての環境教育～

大塚謙一 (静岡大学教育学部教授)



環境問題が21世紀の人類社会の最大の課題となったのは、地球の自然に対して人類社会の活動がその規模を拡大してきたことにあります。人の社会と自然の関係を「規模」という視点から歴史的に見直し、循環の考え方の上にたった環境教育の立場から、日本と世界の関わりの上に成り立つ私たちの暮らしを未来へ向けて考えてみます。

【略歴】東京大学理学部卒同理学系大学院で海洋地質学を研究、静岡大学理学部助手、同教育学部助教授を経て現職。環境教育の構築を目指す。

2010年

第9回
1/9
(土)

生、死、自然

～人間と環境の関係をたずねて～

竹之内裕元 (静岡大学創造科学技術大学院・農学部准教授)



自然を保護するとはどういうことか。そもそもどうして環境を保全するのか。これらの問題について納得のいく答えを手にするためには、人間の「生」そして「死」にとって「自然」がもつ意味について、立ち止まって考えてみる必要があります。こうした視点から、人間と環境の関係について共に探究することにしませう。

【略歴】1967年生まれ。東北大学理学部数学科卒業。同大学院文学研究科博士後期課程(哲学)修了。専門は哲学、死生学、生命・環境倫理学。

第10回
2/6
(土)

講義①

21世紀の羅針盤を求めて

松田 智 (静岡大学工学部准教授)



21世紀を考えるために、まず現代科学技術社会の成り立ちと特質を概観します。次に、20世紀の負の遺産としての環境汚染その他の諸問題を総括し、これに基づいて、主にエネルギー・環境等に関わる現在の技術開発の特徴と問題点を指摘します。最後に、それらを克服するために必要な考え方について、私案を提示します。

【略歴】1954年生まれ。東京工大大学院博士課程修了。長岡高専助手などを経て現職。専門は化学環境工学(環境浄化技術、廃棄物処理とリサイクル、エネルギーと環境など)。

講義②

市民とともに進める環境保全

～棚田再生の記録～

中井弘和 (静岡大学名誉教授)



ある小さな棚田の修復と稲作を通して学ぶ、清沢塾は静岡大学50周年記念公開講座から始まりました。市民・大学の協働によるその活動10年を追いながら、人と自然の関わり合いによって現れてくる、また新たな自然や人・地域の姿を明らかにします。また、棚田の現場にあって実感される、土・植物・動物・人間と廻るいのちの循環の視点から、環境や農業の問題を考えます。

【略歴】1939年生まれ。京大人学大学院農学研究科博士課程中途退学。静岡大学教授を経て現在、名誉教授。専門は植物育種学、持続可能型農業科学。

